

ふるさとのお話



ネギをつくらない 宇東川

今では知る人も少なくなりましたが、原田の宇東川地区には「ネギをつくらない」といふ言い伝えがありました。今回は、その言い伝えをめぐるお話です。

ネギ畑に落ちた氏神様

昔、宇東川地区の氏神様が、白い馬に乗って社殿へ帰ろうとしたとき、馬が何に驚いたのか、急に暴れ出しました。

不意をつかれた氏神様は、握り締めていた手綱を放して、馬から放り出されてしまいました。

氏神様が落ちたところはネギ畑で、ネギの汁が目にしみ、氏神様は目をつぶしてしまいました。

そんなことがあってから、宇東川地区の人たちは、「氏神様に申しわけがない」とネギをつくらなくなり、白い馬も飼わなくなりました。

怒りにふれた強情男

あるとき、強情な男が、「そんなばかな、おれはそんなこと信じないぞ。」と言って、畑にネギをつくりました。

しばらくすると、強情男の家の人が次々に病気になったり、心配

ごとが続くようになりました。さすがの男も「これはネギをつくらしたので氏神様が怒ったのかも知れない」と思い、畑のネギを全部抜き取ってしまった。

ネギは少し抵抗あるね

宇東川町一丁目の秋山只雄さん(七十一歳)は「ネギはつくっちゃいけないと昔の人はよく言っていました。気持ちの問題で、私自身も、ネギをつくるのは少々抵抗があります。でも今は、話を知っている人が少なくなり、ちらほら見かけるよ。」と語ってくれました。



△秋山只雄さん

地名の由来

(今泉地区)

御殿



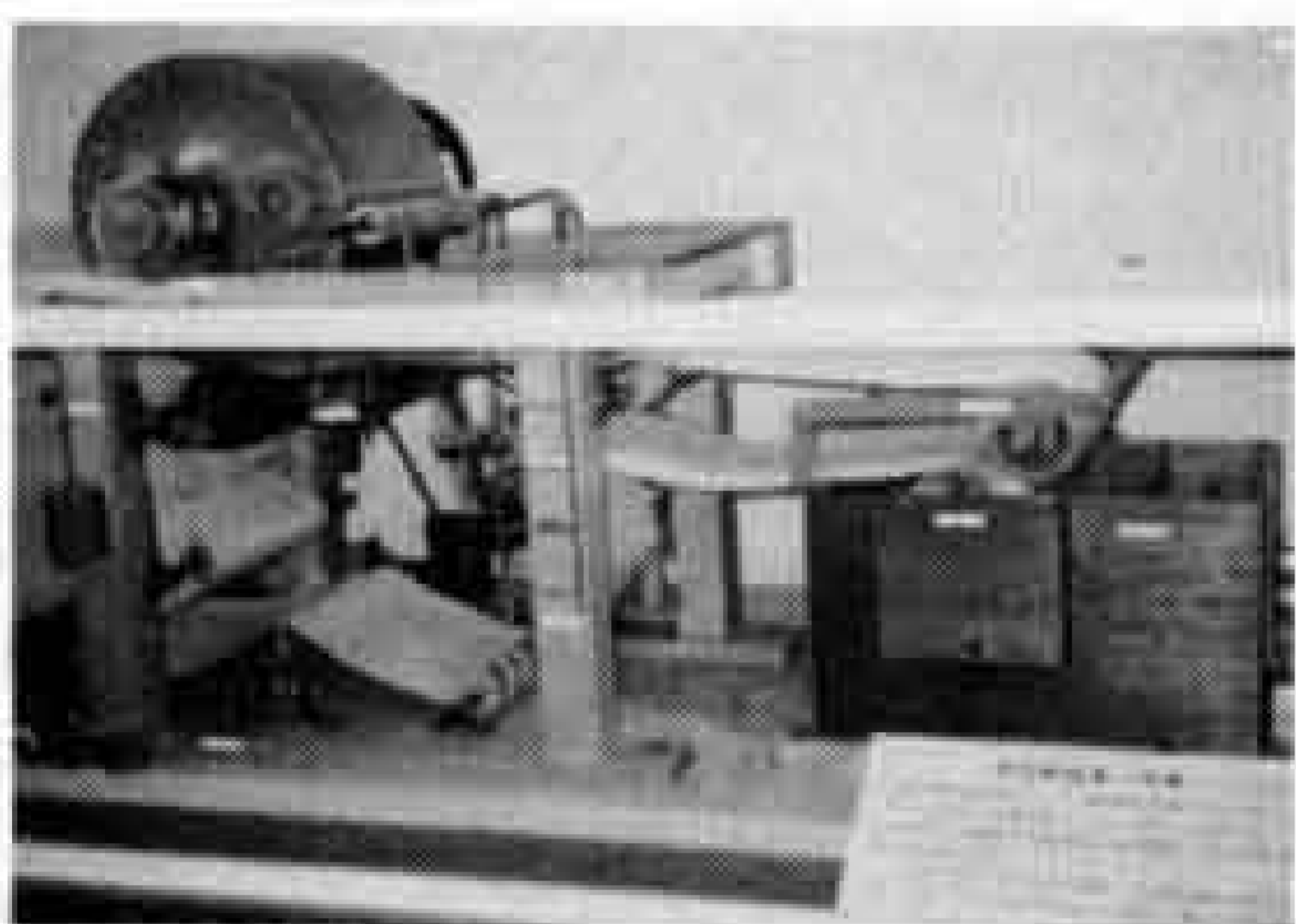
今泉四丁目のあたりを御殿と呼びます。言い伝えでは徳川家康が鷹狩りのとき泊まる家があったので、それを御殿と呼び、そのまま地名になったと言われています。

しかし、一説では、駿河大納言が茶の湯を楽しんだ御茶室御殿があったからとも言われています。この稲荷神社は、その御殿の守護神としてまつられたものだと伝えられています。

こちら編集室

今回で六回目の「まちかどネットワーク」。最近では市民の皆さんの反応もチラホラ出てきました。身近な話題がありましたらお寄せください。八月五日号で、寝たきり老人短期保護事業の負担金を一日千五百円と紹介しましたが、本年度は千七百円です。おわびして訂正いたします。

製紙工業の発展②



▷原田製紙第一号の模型(博物館蔵)

明治23年(1890年)入山瀬に、中央の大資本による富士製紙第一工場ができました。このことは、地方資本家の製紙業への関心を深めました。また、工員に採用された付近の青年が製紙技術を習得し、地元の製紙業の発展に貢献しました。

明治28年には、地元資本による原田製紙株式会社ができ、機械すき和紙を日本で最初に生産しました。

以後、明治41年に富士製紙第8工場(今の本州製紙)、45年に岳南製紙(今の大昭和製紙今泉工場)、大正2年に滝川製紙(今の三島製紙)など製紙工場が大正・昭和の初期にかけて続出しました。

このように富士市における製紙の繁栄は有利な自然条件だけでなく、製紙業にかかわった多くの人の努力による高い技術も見逃すことはできません。